様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６５８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４８８１

研究課題名（和文）高等学校教科外教育における協同性プログラムの改良と普及

研究課題名（英文）Improvement and the Spread of a Collaborative Program in Extra-class Education of a High School.

研究代表者
木内　隆生（KIUCHI, Ryusei）

東京農業大学・その他部局等・教授

研究者番号：１０５３２５６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：高等学校教科外教育（総合的な探究の時間、道徳教育、特別活動）において、高校生の協同性を促進・育成するために開発した授業プログラム（以下、協同性プログラムとする）の改良と普及を行い、協同性プログラムを実際に活用する高校教員の実践的指導力の養成・向上に向けた指導原理を、主としてアドラー心理学とリチャード・ローティの教育思想及び日本協同教育学会の研究知見から再構成し、協同性プログラムを用いた実験授業の映像分析や他のグループ・アプローチとの映像比較により、ファシリテーター役教師の進行方法に関する新たな知見を提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究成果の学術的意義とは、高等学校段階の教科外教育（総合的な探究の時間、道徳教育、特別活動）における授業理論・方法について、教育的グループワークを用いて高校生の協同性を促進・育成するための授業プログラム（協同性プログラム）の指導原理とファシリテーション方法論を再構成・再検証したことである。この社会背景には、アクティブ・ラーニング型授業から主体的・対話的で深い学びへと進化した、新しい学習指導要領が期待する高等学校教育の授業改善がある。

研究成果の概要（英文）：Extra-class education of a high school is 3 kinds, Integrated Studies, Moral Education and Extracurricular Activities. We have developed the class program to promote high school student's collaboration. It was named a Collaborative Program. The purpose of this study is to train the practice power of the high school teacher who uses a Collaborative Program. The principle to guide of a Collaborative Program was mainly reorganized from Adler psychology, an educational philosophy of Richard Rorty and knowledge of a Japan Association for the Study of Cooperation in Education. We analyzed a picture of a video, that experimental class using the Collaborative Program. Picture with the experimental class and the class of the other group approach was compared. As a result, common points of progress method of facilitator was picked out.

研究分野：学校教育

キーワード：高等学校教育　ホームルーム活動　在り方生き方教育　総合的な探究の時間　協同性プログラム　グループワーク　リチャード・ローティ　アドラー心理学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)本研究の社会背景には、教育方法学の研究者が指摘したアクティブ・ラーニング型授業から「主体的・対話的で深い学び」へと進化させた、平成 29～30 年改訂の学習指導要領が期待する高等学校教育における授業改善がある。これは従来から行われていた一斉授業型の高校・大学の講義方式に対して、小・中学生を含めて高校生・大学生までの授業参加の機会を促進する、学習者参加型の授業方式への転換を求めるものである。

(2)これまで高等学校の授業は、上級学校への進学や就職のための資格取得などに偏って各教科中心で行われてきた背景がある。高校生の将来に向けた自己実現が他者との望ましい人間関係の構築とともに達成されるという観点、あるいは、いじめや引きこもりなどの人間関係の発達阻害という喫緊的な課題を乗り越える観点からも、将来的にはますます、各教科に限ることなく教科外教育（総合的な探究の時間、道徳教育、特別活動）の革新的な授業方法の開発が期待されていることとなる。

２．研究の目的

(1)本研究の総括的な目的は、高等学校教科外教育（総合的な探究の時間、道徳教育、特別活動）において、高校生の協同性を促進・育成するために開発した授業プログラム（以下、協同性プログラムとする）の改良と普及を行うことである。協同性プログラムの指導原理や実施方法などについて、基礎学問として臨床心理学や教育思想、教育的グループワークの起源と歴史等に関する先行知見、そして先端的な学問領域への拡大の可能性や教育方法論の最新の研究知見などから、改良点や普及の意義と方略を探ることである。

(2)本研究の具体的な目的は、協同性プログラムを教科外教育の授業に活用する高校教員の実践的指導力、すなわち進行役教師としてのファシリテーションの在り方を究明することである。現在まで高等学校教科外教育（高等学校の道徳教育は、人間としての在り方生き方に関する教育と同義と定義し、これ以降は「在り方生き方教育」とする）は、ホームルーム担任教員が主として受け持ってきた。各教科の専門家を自認してきた高校教員が、教科外活動の各授業をどのように企画・運営・実行・評価するかという将来的な課題に対して、道しるべとなる方向性と実現可能な授業方法論を提供することとなる。

３．研究の方法

(1)協同性プログラムの理論基盤を改良するために、4 つの CGW（高め合い GW・学び合い GW・支え合い GW・創り合い GW、なお、CGW とは Collaborative Group Work の略称で筆者が命名したもである）の拠り所となる指導原理を関連する学問領域（臨床心理学・発達心理学、教育哲学・教育方法学など）や関連学会（日本特別活動学会、日本協同教育学会、日本生活科・総合的学習教育学会など）及び研究会（全国特別活動研究会、東京都高等学校特別活動研究会）などの理論研究と実践知見から再構築する。

(2)協同性プログラムの高等学校現場への普及を目指して、プログラム進行をホームルーム担任教員による進行へと転換していく道筋や、ホームルーム担任など教科外教育の担当教員を啓発する方法について、教職課程の学生（3～4 年生の教員採用試験受験希望者）、現職教員（教員免許状更新講習の参加者など）、そして教科外教育に関連する各種研究団体等の会員・参加者を対象とした実験授業やモデル授業を通して実証的に明確化する。

(3)協同性プログラムの進行役教師が身につけたいファシリテーションの在り方を明確化するために、協同性プログラムを用いた実験授業と他のグループ・アプローチのモデル授業について、ビデオカメラの映像記録を逐語録化した上で、質的分析（研究者が映像を視聴しながら逐語記録を会話分析する）と量的分析（逐語記録をテキスト・マイニングから言語分析する）とを行い、ファシリテーション方法を多重的に比較・検討する。

４．研究成果

(1)支え合い GW の理論部分を構成する基盤理論の一つとしてアドラー心理学の共同体感覚理論と勇気づけの技法がある。2017 年 9 月に小中高の現職教員 40 名（5 名×8 グループ）を対象として支え合い GW を用いた CGW 授業（グルーピング・アイスブレーキング・CGW・フィードバックの 4 種類で構成された授業）を 120 分間ほど実施した。

　授業の様子をビデオ映像に録画するとともにグループ作業で用いたワークシート 40 枚の記述を質的分析（研究者がカテゴリー分析）した結果、人が励まされる言葉は「人格の肯定」「過去の肯定」「現在の肯定」「肯定的な将来展望」「共同性」の 5 カテゴリーに整理された。さらに勇気づけに関する新しい知見が得られた。すなわち、過去の行動や経験を肯定的に評価する言葉や、それらが今につながっていることを指摘する言葉が他者への励ましになり、これまで過去に起きたことは変えられないとしてきたアドラー派の主張に対して、再検討する視点を提供したと考えられることである。その詳細については、以下の論文を見られたい。なお、論文の抜き刷りをご希望の方は、rk205717@nodai.ac.jp までご連絡ください。

（鈴木聡志・木内隆生 2018 「人はどのように励まされるのか　―協同的なグループワークのワークシートの質的分析より－」東京農業大学「教職研究集録」第 3 号）
　研究成果のもう一つは CGW 授業のテーマ設定である。テーマは「子ども時代からの将来の夢を振り返る－応援メッセージによる励まし－」で、高校生のキャリア教育にも汎用可能な学習材である。参加者の肯定的評価は極めて高く（分析対象の指標となる赤い感謝ラインは、全ての応援メッセージに対して引かれた。記入率 100%）、高等学校教科外教育の授業で取り扱うことに相応しいテーマ設定と学習材であることを裏付けている。

(2)ホームルーム活動で用いる高め合い GW の理論的基盤には民主的社会の形成者育成がある。初期のグループワークは 170 年ほど前の英国の YMCA 運動からスタートした。日本への本格的なグループワーク導入は、戦後の IFEL（青少年教育指導者講習会）での講義と演習であった。現在のグループワークは日米とも心理・医療系が主流である。しかし、米国のグループワークの歴史を丁寧にひもとくと、教育的グループワークが注目された時代は、19 世紀後半の萌芽期と発展途上期の 1950 年代の 2 回であることが判明した。
　発展途上期での教育的グループワークの普及者に強い影響を与えたのが、ジョン・デューイ（1859～1952）である。さらにデューイら（ウィリアム・ジェームズやチャールズ・S・パース）が確立したプラグマティズム思想を積極的に評価し、継承した哲学者の一人がリチャード・ローティ（1931～2007）である。ローティは教育学への造詣も深く、CGW 授業で用いる高め合い GW の授業方法論をローティの教育思想から読み解くことが、高校生が民主的な社会の形成者として成長するという観点、具体的には連帯、対話、寛容、道徳、共感、想像などのキーワードを解釈する上での共通性から可能となり、結果として協同性プログラムのホームルーム活動への汎用可能性を示すこととなった。その詳細については、以下の論文を見られたい。なお、論文の抜き刷りを希望する方は、rk205717@nodai.ac.jp までご連絡ください。
（木内隆生 2019 「高校特別活動へ汎用するグループワークの検討　－リチャード・ローティの教育思想に着目して－」日本特別活動学会紀要第 27 号）
　また、高め合い GW が高等学校の「在り方生き方教育」へ汎用されることも、ローティの道徳教育論と多くの共通点が指摘できるところである。

(3)高等学校の総合的な探究の時間は、平成 30 年 3 月改訂の高等学校学習指導要領から名称変更され、今期学習指導要領改訂における改善事項の眼目の一つである。いわゆる探究学習（総合的探究の時間を含めて、「古典探究」「日本史探究」「理数探究」など新設された探究科目、及び探究的な学校設定科目での学びの総称）が、「主体的・対話的で深い学び」の具体的な授業実践例として提案されたこととなる。
　一方、CGW 授業で用いる学び合い GW の教育的効果について、筆者はこれまでも、総合的な学習の時間を中心とした授業方法論として幾つかの実践例を紹介してきた。本研究では、総合的な探究の時間において取り扱う課題（以下、探究課題とする）の設定と追究方法について再度、学び合い GW を用いた発展的授業として、その可能性を探ることとした。
　この探究学習については、数年前から進学校を中心に SGH（Super Global School）や SSH（Super Science School）として試行されており、現在はかなり定着しつつある。高等学校学習指導要領は 20 年前から学校設定科目・教科の一つとして、このような各教科にない独自科目の設置を認めてきた。ただし進学校以外の高等学校では、キャリア教育を中心に探究学習の授業を展開する以外は、学校行事の事前・事後指導の時間に用いられるなど、探究学習の水準に到達していない様相も指摘されている。
　本研究ではまず、探究課題を設定し追究するための判断基準となる学問領域を、科研費資料に示された最新研究領域の分析を通して明確化した。次に総合的な探究の時間を有用化するためにカリキュラム構成の基本理念と担当教員の授業実践力育成との関連・構造を検討した。さらに学び合い GW を用いた授業と日本協同教育学会が協同学習として推奨・実践してきた授業実践理論とを比較・検討しながら、互いの特徴や相違点を考察・図解した。
　このような検討結果を踏まえて、総合的な探究の時間に援用するアクティブ・ラーニング型の授業方法論として学び合い GW を汎用する妥当性・有効性を示すとともに、これを教職課程の実験授業に取り入れることで新規採用予定教員の授業実践力の育成を行い、さらに教員免許状更新講習など現職研修におけるモデル授業を通して、高校教員の授業実践力を補強する方策について提案した。この詳細については、以下の論文を見られたい。なお、論文の抜き刷りを希望する方は、rk205717@nodai.ac.jp までご連絡ください。
（木内隆生 2019 「『総合的な探究の時間』における探究課題と追究方法の検討　－教員養成課程での授業実践力育成を目指して－』 日本生活科・総合的学習教育学会誌『せいかつ＆そうごう』第 26 号）

(4)本研究ではこの 3 年間、協同性プログラムを用いた CGW 授業の様子を、ビデオカメラ映像へ記録することに努めてきた。その目的は CGW 授業を進行する教師のファシリテーションの在り方を明確化することである。その先に、CGW 授業のプログラム進行をホームルーム担任教員による進行へと転換していくことを目指している。そこで協同性プログラムを用いた実験授業と他のグループ・アプローチによるモデル授業について、ビデオカメラ映像を資料化すること

で比較分析・考察することとした。
　協同性プログラムを用いた実験授業のデータは、2018 年 12 月に大学 3 年生 27 名を対象として約 130 分間実施したものである。実施内容及びテーマ設定は、高め合い GW のテーマ「部活動の朝練習か、友人の援助か」から、創り合い GW のテーマ「困っている A 君のためにできること」へ連続するという共同作業であった。
　一方のモデル授業データは、國分康孝・國分久子が監修した構成的グループエンカウンターの授業ビデオ映像で、ファシリテーターは岡田弘である。岡田が中学 1 年生 34 名を対象に約 50 分間の授業を行い、それを 34 分間に編集しなおしたものである。
　まず、2 つのデータは専門業者によって逐語録化された。さらに研究者により導入、ウオーミングアップ、インストラクション、エクササイズの 4 部分で比較・検討された。分析方法として質的には研究者が映像視聴をしながら逐語記録の会話分析を行った。量的方法としてテキスト・マイニング（Text Mining Studio6.2）により言葉と話題のまとまりをネットワーク化した。
　その結果、協同性プログラムによる実験授業と構成的グループエンカウンターのモデル授業について、進行役教師のファシリテーションに関する 4 つの共通指針が抽出された。具体的には、①導入時の目標と内容、ルールの丁寧な説明、②エクササイズにおける適切な介入、③授業の目的に繰り返し触れること、④今何をしているかへの適切な意味づけである。
　その詳細については、以下の論文を見られたい。なお、論文の抜き刷りを希望する方は、rk205717@nodai.ac.jp までご連絡ください。
（鈴木聡志・木内隆生 2020 「グループワークにおける進行役教師の行動の分析　－協同的グループワークと構成的グループエンカウンターによる授業の映像記録を用いて－」東京農業大学「教職研究集録」第 5 号）

(5)本研究の成果のまとめとしては、高等学校教科外教育（総合的な探究の時間、道徳教育、特別活動）の授業へ汎用する協同性プログラムについて、まず、支え合い GW の指導原理に用いたアドラー心理学の実践理念を再検討する観点が指摘され、実験授業の結果分析からプログラムと設定テーマの有効性を示すことができた。また、高め合い GW の指導原理として新たにリチャード・ローティの教育思想を援用することで、ホームルーム活動への汎用可能性を示唆することができた。さらに学び合い GW を総合的な探究の時間に汎用することについて、日本協同教育学会の協同学習に関する理論知見との比較・検討、及び教職課程の実験授業や現職研修におけるモデル授業の導入によって、高校教員の授業実践力向上の方策を提案した。
　一方、CGW 授業を企画・進行するホームルーム担任教員などの資質向上を目指して実験授業（高め合い GW から創り合い GW への連続）とモデル授業（構成的グループエンカウンター）についてビデオカメラ映像による質的・量的な比較・検討を行った。結果として、進行役教師がファシリテーションを行うときに留意すべき共通指針を抽出することができた。
　本研究の課題は、協同性プログラムを企画・進行する教師のファシリテーションの在り方を提言することはできたものの、高校教員をファシリテーターとして養成するまでは至らなかった点である。
　今後は生徒指導の教育課程化（あるいは生徒指導の授業化）の観点からホームルーム担任教員に加えて、ガイダンス・ティーチャー（生徒指導担当教員）などを新たに位置づけることがある。ガイダンス・ティーチャーと教科外教育の授業との関係性や役割分担を明確化していくことで協同性プログラムの有効性がより拡大すると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鈴木聡志・木内隆生	４．巻 第5号
２．論文標題 グループワークにおける進行役教師の行動の分析　－協同的グループと構成的グループエンカウンターによる授業の映像記録を用いて－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京農業大学教職課程『教職研究集録』	６．最初と最後の頁 25～31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木内隆生	４．巻 第27号
２．論文標題 高校特別活動へ汎用するグループワークの検討　－リチャード・ローティの教育思想に着目して－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本特別活動学会紀要	６．最初と最後の頁 19～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木内隆生	４．巻 第26号
２．論文標題 「総合的な探究の時間」における探究課題と追究方法の検討　－教員養成課程での授業実践力育成を目指して－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本生活科・総合的学習教育学会誌「せいかつか＆そうごう」	６．最初と最後の頁 68～77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木聡志・木内隆生	４．巻 第3号
２．論文標題 人はどのような言葉で励まされるのか－協同的なグループワークのワークシートの質的分析より－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京農業大学教職課程『教職研究集録』	６．最初と最後の頁 21～31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 鈴木聡志・木内隆生
2．発表標題 人が励まされる言葉の探索的研究
3．学会等名 日本生徒指導学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 木内隆生
2．発表標題 特別活動における主体的・対話的で深い学びとは？
3．学会等名 全国特別活動研究会・夏季研究会（招待講演）
4．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

1．著者名 梅澤秀監、木内隆生、嶋崎政男	4．発行年 2019年
2．出版社 大学図書出版	5．総ページ数 173
3．書名 特別活動15講と総合的学習8講	

1．著者名 和田　孝、有村　久春	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 216
3．書名 新しい時代の生徒指導・キャリア教育	

１．著者名 長沼豊	４．発行年 2019年
２．出版社 大学図書出版	５．総ページ数 199
３．書名 実践に役立つ教職概論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	鈴木　聡志 (SUZUKI Satoshi) (70259208)	東京農業大学・教職課程・准教授 (32658)	